

(5)

氏名(生年月日) 中 村 和 代
ナカ ムラ カズヨ
 本 籍
 学位の種類 医学博士
 学位授与番号 甲第5号
 学位授与の日付 昭和37年3月30日
 学位授与の要件 医学研究科皮膚科学専攻, 博士課程修了者(学位規則第5条第1項該当)
 学位論文題目 実験白癬の研究
 論文審査委員 (主査)教授 中村敏郎, 教授 今井三喜, 教授 三神美和

論文内容の要旨

真菌性皮膚疾患中白癬の原因菌である白癬菌は、わずかの例外を除けばその大部分が毛髪、爪および角質層内に局限して発育する。従つて角質層内への侵襲の状態を明らかにする必要がある、殊に髪内への侵襲門戸については今日まで明かでなく、この解明を研究の拠所とした。すでに皮膚糸状菌の動物実験による組織学的研究の報告は、Hanawa, SaevuI, 安藤, 高橋, 森川, 武者らがあるが精細な研究は比較的少ない。著者は数種の菌株をモルモット背部皮膚に接種し、紅斑出現後逐日皮膚組織を切除し、PAS染色を行い菌の角質層内および毛髪内の侵襲状態について詳細に観察を行った。使用せる菌株は *Microsporum gypseum*, *Trichophyton mentagrophytes*, *Trichophyton rubrum*, *Trichophyton ferrugineum*, *Trichophyton Schoenleinii*, *Epidermophyton floccosum* 等の6種菌株である。組織学的に比較し、特に菌の毛髪に対する態度を述べれば、*Microsporum gypseum* は毛孔より毛髪を纏絡下降して毛球上部で二

分岐し、一つは毛球にそつて下降、一つは毛髪内に侵入し更に二分岐して一つは尖端を上にして上行、一つは尖端を下方にして下降発育して毛球内は菌要素で充満する。

Trichophyton mentagrophytes は毛孔より毛髪を纏絡下降し、毛髪中央部より毛髪内に侵入し尖端を下方にして発育しながら下降し、*Keratogenous zone* より下部には侵入発育しない。菌要素が豊富なのに比べて炎症は菌の量に左右されず軽度であつた。*Trichophyton rubrum* は毛孔より毛髪を纏絡下降して毛髪頸部より毛髪内に侵入し尖端を下方にして毛髪内を下降発育する。*Keratogenous zone* より下部には侵入発育しない。*Trichophyton Schoenleinii* は菌甲を形成し毛孔より毛髪を纏絡下降する。*Trichophyton ferrugineum*, *Epidermophyton floccosum* は何等の組織学的所見も得られなかつた。以上のことより組織学的にも個々の菌学的差を認め得た。

論文審査の結果の要旨

白癬の原因菌である白癬菌は僅かの例外を除いて大部分が毛髪、爪及び角質層を好んで発育する。従つて角質内への侵襲の状態を明かにすることは病理的に、また臨床的に意味がある。殊に毛髪内への侵入門戸についてはなお明かでない。著者はこの解明に努力したのである。

研究方法は数種の菌株をモルモットの背部皮膚に接種し、紅斑出現後逐日皮膚組織を切除し、PAS染色を行い菌の角質層及び毛髪内への侵襲状態について詳細な観察を行った。

実験の結果、動物接種に陽性を示した *Microsporium gypseum*, *Trichophyton mentagrophytes*, *Trichophyton rubrum*, *Trichophyton Schoenleinii* を比較すると、*M. gypseum*, *T. mentagrophytes*, *T. Schoenleinii* などは発赤の発現が接種後4~5日で、皮膚正常化に25日を要したが、*T. rubrum* は発赤発現が9日で、皮膚正常化に30日を要した。これらを組織学的に比較観察すると、特に菌の

毛髪に対する態度について、*M. gypseum* は毛孔より毛髪を纏絡下降して毛球上部で2つに分岐し、1つは毛球に沿って下降し、1つは毛髪内に侵入し、さらに2分岐して1つは先端を上にして上行、他は下に向って下行し、漸次発育して毛球内を菌要素で充満させるのを認めた。*T. mentagraphytes* は毛孔より毛髪を纏絡下降し、毛髪中央部より毛髪内に侵入し、先端を下方にして発育し下降した。菌要素の豊富にも拘らず炎症々状は軽度で、菌量には左右されないことを認めた。*T. rubrum* は毛孔より毛髪を纏絡下降して毛髪頸部より毛髪内に侵入し、先端を下にして毛髪内を下降しつつ増殖する状態を認めた。*T. Schoenleinii* は菌甲を形成し、毛孔より毛髪を纏絡下降した。本菌の人体罹患の際にしばしば癩痕を残して治療する事実符合して、実験動物においても表皮及び真皮の炎症は著しかった。

主論文公表誌

実験的白癬の研究，東京女子医科大学雑誌 第31巻
第10号 443～450頁（昭36）。

参考論文公表誌

1. 潰瘍治療の実験的研究，東京女子医科大学雑誌
30（11）2614（昭35）。
2. シェーンライン黄癬菌の菌種同定，東京女子医科

大学雑誌 31（8・9）382（昭36）。

3. ダイロデルム・クリームの使用経験，新薬と臨床
10（12）1159（昭36）。
4. 悪性黒色腫の2例，東京女子医科大学雑誌 31
（11）633（昭36）。
5. 弗素イオンによる2，3皮膚疾患治療への応用，
東京女子医科大学雑誌 31（12）608（昭36）。